

み吉野の

水隈が菅を

編まなくに

刈りのみ刈りて 乱りてむとや

作者未詳 (巻十一・二八三七)

なるでしょうか。恋人に誠実さを求める心が歌い表されています。

ところで、菅笠などの菅細工を作るには、刈った菅を乾燥させて保存し、使う際に水に浸して柔らかくしてから使うそうです。ただ刈り乱しておくのではなく、入念な手入れが求められるのは、菅細工も恋愛関係も同じであるようです。

古代の人々は、水辺や湿地帯に生える植物を生活のためによく利用していました。それは身分の低い人たちだけでなく、天皇や貴族も同じでした。平安時代の「延喜式」によれば、摂津国(現在の大阪府北中部から兵庫県南東部)から天皇の御輿の蓋を作るための菅が納められていたようです。このように、生活のための植物利用

は全ての人に身近なものだったため、「万葉集」にもそれに関わる歌がいくつが残されています。

今回で紹介するのは、歌は、吉野の水隈、つまり吉野川が折れ曲がっているところに生える菅が詠まれています。その菅について、編むつもりもないのに刈るだけ刈っておくことへの不満が述べられているため、吉野川で

やまと 万葉がたり

の菅刈りも笠か何かを編むために行われることが多かったのかも知れませんが、菅笠は難波のもものも有名だったようです。「おし照る 難波菅笠 置き古し 後には誰が着む 笠ならなくに」(巻十一・二八一九)という歌があります。そのままだめば、菅笠を着けもせず古びさせておいたら、も

う誰も着けようとは思わなくなるでしょう、といった意味になりそうです。しかし実は、この菅笠は女性の例えで、訪れぬ男への不満が歌われていると言われています。

そしてまた、吉野の菅を詠んだ二八三七番

【訳】み吉野の川隈の菅を笠に編むつもりもなく、刈るだけ刈って乱そうとなさるのですか。

(県立万葉文化館主任 研究員・吉原啓)

次回回は18日

月見れば 国は同じそ

山隔り 愛し妹は

隔りたるかも

柿本人麻呂歌集(巻十一・二四二〇)

私は夏が大の苦手です。先日仕事帰りに見た空が高く、透き通る月光が秋めいていて、心が躍りました。そんな秋は、月をめぐる季節です。今年の仲秋は13日でしたね。今回の歌の季節は不明ですが、月をめぐる万葉びとたちの思いをご紹介します。

月を見ると同じ国に
いることが実感でき
る。なのに、いとおし
い妻(あるいは恋人)
との間には山が隔たっ
ていて逢うことができ
ない、といいます。山
は二人の間を引き裂
く、越えがたい障害と
して捉えられていま
す。「隔り」が二度も
使われていることか
ら、隔たった二人の頭
上に輝く月の風景が、
いっそう際だっている
ように思われます。

同じ発想の歌は他に
もあります。「月見れ

やまと
万葉がたり

ば同じ国なり山こそば
君が辺を隔たりけ
れ(巻十八・四〇七
三)。この歌は大伴家
持の越中国守時代の部
下であった大伴池主
が、越前国に赴任した
後に詠んだ歌です。二
人は上司と部下であ
りながら、詩歌を贈り
あう親友でした。同じ
国土にいるのに親友
に会えない歯がゆさ
を、月と山に託した
のだといえます。おそ

らく今回の歌は、会い
たい人に会えない思い
を詠む時の定型として
知られた歌だったので
しょう。

私はこれらの歌を見
て、ある漢詩を思い出
しました。「山川域を
異にすれども、風月天
も、天に輝く月は同じ
を同じくす。諸の佛子
に寄せて、共に来縁を
結ばん」。長屋王が唐
の鑑真に贈った袈裟に
記した詩です。鑑真は
この詩を見て来日を決
心したと伝えられてい
ます。どこに居ても、
何を隔たっているかと
思っていると、当たり前
に、人の心のつな

【訳】月を見ると、国は同じであることよ。だのに
山が隔つていといしい妻は逢いがたく隔っている。

(県立万葉文化館主任
研究員・大谷歩)

次回(10月2日)

がりは実際の距離では
ないという、強いメッ
セージが込められてい
ます。今回の万葉歌も、
歌の真意はここにあっ
たのかもしれない。

万葉びとたちが誰か
を思う時に見た月。彼
らと同じ月を見ている
と思うと、当たり前前
の風景は急に違う景色に
変わります。「万葉集」
をもっと知りたくなる
ゆえんです。